

笠ヶ岳

山行日：平成 23 年 9 月 10 日(土)～11 日(日)

メンバー：L 柴田、lady、石津和

9 月 10 日(土) 晴れ時々曇り

中尾温泉口駐車場(6:52) - 穴滝(クリヤ谷右岸から左岸へ渡渉・8:00) - 左岸から右岸へ渡渉(9:12) - 最終水場・標高 2000m 付近(12:35) - 雷鳥岩・ビバーク地点(14:45)

中尾温泉口の駐車場から槍見館に向かって進む。この登山口は、錫杖岳に登攀に向かうパーティがほとんどで、クリヤ谷を笠ヶ岳に向かうパーティは見当たらない。槍見館から左に入り、クリヤ谷の右岸を進む。穴滝の上で右岸から左岸に渡渉し、錫杖岳の下で左岸から右岸に渡り直後に左岸に戻る。クリヤ谷の大雨直後は注意が必要とあるが、たぶんこの 3 カ所の渡渉を示しているのだと思う。



クリヤ谷渡渉地点・左岸から右岸(9:12)

しばらくして、朝 6 時に笠ヶ岳を出発したという男性が下山してきた。両手にストックを持ち荷物はさほど多くないが、とんでもない悪路でズボンがぐしゃぐしゃになり、雨具のパンツを履いたとぼやいていた。その割には汚れていないと思ったが、こんな道を登るのか、やめた方がよいと言うようなことをつぶやいていた。

標高 1800m を越えたあたりから、勾配が急になり、笹の中を縫うように登る。下山してきた男性から沢を渡ると聞いたため、その沢を目指してひたすら進むが、太陽は容赦なく照りつけとにかく暑い。右側の沢で水音がするが、一向に近づかない。水を求めて 2 時間余り、やっとの思いで沢に着きビバークに備えて水を確保した。一休みして出発。プラス 3 L は耐えがたく重くて疲れた脚にのしかかる。水を確保した時点で皆、ビバークを覚悟

している。この足取りではとても今日中に笠は越せない。前夜のミーティングで花村さんから聞いた「雷鳥岩付近に幕営できる」が頭から離れない。



エボシ岩と錫杖岳(10:13)



雷鳥岩とピバーク地点(14:48)

クリヤの頭を左に巻き、沢から2時間、登山道は笹からハイマツ帯に変わった。左に大きな岩が見えてきた。たぶんこれが雷鳥岩であろうと付近を見回すがとても幕営できそうもない。念のため右側の岩棚へ3mほど登ってみたところ、3人用テントがちょうど入る広さの幕営地を発見できた。先人のベグまで残っている。この場所は普通に登山道を歩いては見つからない。まだ、3時前であるがこの岩棚を今宵の宿とした。十三夜の月を肴に酒宴が盛り上がったことは言うまでもない。

9月11日(日) 晴れ

雷鳥岩(4:45) - 笠ヶ岳(7:06) - 笠ヶ岳山荘(7:30 - 8:00) - 抜戸岩(8:26) - 笠新道分岐(9:08) - 杓子平(10:20) - 左俣林道(12:58) - 新穂高登山口(14:00) - 中尾温泉口駐車場(14:45)

3時起床、月は沈み星が瞬いている。ヘッドランプで出発した。ハイマツの根と岩に足を取られて歩きにくい。尾根上にヘッドランプが動いている。我々より先のパーティもビバークしたようである。5時半になってやっと明るくなってきた。尾根に出て大キレットからの日の出を拝む。槍の穂先がくっきりと見える。槍ヶ岳の花村パーティもご来光を仰いでいる頃だと思う。振り返ると昨晚お世話になった雷鳥岩、焼岳、乗鞍岳、御嶽山と雲海に浮かんで見える。この景色を見ると山に居る喜びを感じてしまう。しばし皆で景色を堪能してしまった。

槍ヶ岳の花村パーティに6時に無線で呼びかけるが、昨日から応答がない。剣岳やら安曇野などあちこちの電波を拾っているのに何で届かないのか、もしや彼らが槍平に居るのかと考えてしまう。



大キレットのご来光(5:36)



霞沢岳・焼岳・乗鞍岳・御嶽山・雷鳥岩(5:46)



笠ヶ岳山頂直下(6:40)

笠の頂上は見えているのになかなか着かない。下山してくる登山者から「早いですね」と声を掛けられてルート状況を尋ねられる。その都度、昨日の顛末を伝える。このルートは皆不安なのであろうか、道は長いが取り立てて問題はない。雷鳥岩から2時間20分、概ねコースタイムで山頂に立った。笠ヶ岳は北アルプスのほとんどの頂から見る事ができる。当然、笠ヶ岳からの展望はよい。

笠ヶ岳山荘のテラスでゆっくりとコーヒータイムを取り、今日2回目の朝食を詰め込んで笠新道の長い下りに備えた。笠新道は想像以上に厳しく、昨日からの長丁場で足に力が

入らず、左俣林道までの道のりは非常に長く感じた。林道合流点での、湧き水は最高のご褒美であった。



笠新道分岐から笠ヶ岳を振り返る(9:07)



杓子平を下る(9:36)

笠ヶ岳を8年越しに踏むことができた。8年前の6月、井藤さん、布田さんと3人パーティで杓子平まで登った。あのときの笠新道上部は、残雪でルートが読めずに枯れ草とハイマツをつかんでよじ登った記憶がある。杓子平から見上げた、抜戸岳、笠ヶ岳は白く輝き、遙か遠くに見えた。笠ヶ岳、期待どおりの大きな山であった。

(記 石津和利)